

Title	場をひらく
Author(s)	赤阪, 辰太郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 21 P.4-P.7
Issue Date	2014-05-22
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/40502">http://hdl.handle.net/11094/40502</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 場をひろく

赤阪辰太郎

誰かと話し合うこと。問題解決や団結を目指すのではなく、自分の思いを打ち明け、相手の言葉を受け入れること。話し合いの場をデザインすること。話し合いのもつ意味について考えること。

話し合うことをめぐるさまざまな側面に私をはじめ「自分のこととして」出会ったのは、二〇一三年の冬のことだった。そのきっかけとなった私の経験について語ることからはじめてみたい。

私は二〇一三年三月まで大阪大学のある学生寮に住んでいた。寮は男子専用で、四階建ての鉄筋の建物が二棟続いている。私が住んでいた当時、寮内には人々が集うスペースがなかった。自治会もないため、寮生は互いにあまり交流をもたないまま暮らしていた。寮では風呂、トイレ、台所といった共同スペースを利用するとき以外に他人と出会うことがほとんどない。その意味で、私の寮生活は一人暮らしの大学生のそれとたいしてかわりがない。大学に近く、また寮費は安いいため、私は寮での生活に概ね満足していた。

事件は一月の最終週に起きた。私が授業を終えて寮に戻ると、ポストに大学からの通知文書が入っていた。「留学生との混住化について」という題がついたその文書には、この寮を留学生との混住寮にすること、B棟（二つの棟はそれぞれA棟、B棟という。私はA棟に住んでいた）の西側半分を留学生のための居室とすること、そのためB棟西側に住んでいる寮生に居室移動を求めると書かれている。「寮生の皆様が異文化に触れ国際的感覚を身につけることを目指すため」と文書は言っていた。「実験的にこの寮で混住化を行います。他の寮では、この寮での動向をみて、順次混住化する予定です」。この通知文書を読みながら私は胃のあたりがむかむかするのを感じた。私は怒っていた。

ポストの前で二度読んだ後、自室に戻ってもう一度文書を読み返した。そして、大学に抗議しようとメールソ

フトを開いた。文書に記載されていたアドレスを打ち込んだとき、あることに気づいた。私は四回生であり、今年で寮を出ることになる。混住化が実現したとき私はここにいない。また、B棟の寮生と違って居室の移動を迫られているわけでもない。どのような立場において私は不平を言うべきなのだろうか、途端にわからなくなった。そして、これから出ていくだけの私がメールで抗議すること自体が何かまずさを含んでいるのではないか、という考えが頭に浮かんだ。私はB棟の住民の代弁をするわけではないし、混住化した寮に住むであろう未来の寮生を代表するわけでもない。この件について、私が当事者として大学に抗議することは認められるのだろうか。もちろん真剣にそのように考えていたのではない。メールを受け取るであろう大学職員が私のメールを見た場合、それを誰による、どのようなものとして読むか。それを了解した上で私の意見を「取り合うに値するもの」として処理するか、ということに思いをはせたのだ。

私は不意に、他の寮生がどう思っているのかを聞いてみたくなった。移動しなければならぬB棟の寮生が、これから留学生とともに暮らす下回生が、そして私と同じように今年卒業する寮生が、この文書を受け取って何を感じたのか。違和感を抱いた者はいるだろうか。文書を読んだときの怒りは私だけのものなのだろうか。話し合うことで多くのことが確認されるのではないかと感じた。私は誰かと話そうとしていた。

私の関心が他の寮生と話すことへと向けかえられたとき、何かが変化するのを感じた。それはまず、実践的な課題の変化としてあらわれた。どのようなメールを打つのか、私の怒りが正当なものであるかどうかを見極める基準をどのように定めればよいか、といった当初の課題は消え去り、誰に対して呼びかけ、いつ、どこで、どのような形式で、どれだけの時間話し合うのがよいか。当日は会場に何を留意したら話しやすいか。そうしたことが問題となった。

課題の変化にともなって、目指すものも変化した。問題を解決したいという欲望や、大学に抗議したいという気持ちよりは、同じ問題に直面している人々の声を聞きたいという思いが強かった。声を聞くためには、話し合うこと以外の目的をもたない話し合いの場が必要だ。場をひらくだけではいけない。抗議や問題解決を目指した

話し合いがしばしば話しているその人の姿を見えなくするということを、私は経験的に知っている。誰かの声を聞くためには、自分のあり方をさらしつづつ、相手にかかわるといふ態度が求められる。

このとき、私が向き合っていたのは私を怒らせたあの文書ではなく、また大学などといった抽象的なものでもなく、私がかつとも話したいと感じる寮生たちだった。変化が起こったときにはまだ、寮生たちとは特定の諸個人を指していたのではない。そうではなく、私がつながることを期待し、また相手が私に対して思いを打ち明けてくれることを期待するような人々だった。私は場のセッティングについて考えながら、心強さを感じていた。私は一人で悩んでいるわけではない。これからつながるだろう人々とともにあるような気がした。

結果を先取りして言うと、話し合いは期待どおりには進まなかった。

文書を受け取った次の日、寮の一階にある掲示板に「一月××日××時から、寮のロビーにて、留学生との混住化について話し合いませんか」と書き込んだ。寮のロビーにはいくつかの椅子とテーブルが置かれている。ただ、冬場はとても寒く、集まってくつろげるような場所ではない。利用する寮生もほとんどいない、形だけのロビーだった。当日、私は自室からヒーターを持ち出し、お菓子と飲み物、紙コップを用意して誰かがあらわれるのを待った。話し合いには五名の寮生がやってきた。B棟に住むある寮生は、居室の移動にかかる費用、住所変更のための公的な手続きなどについて、不安と不満を語った。彼の語ったことのなかには、私が一人で考えているときには思い至らなかったことが含まれていた。それだけでなく、私の呼びかけと彼の語りのあいだには別の何かが浮かび上がりかけていた。それは曖昧で、はっきりとした輪郭をもたなかったが、私は彼の語りのなかにその手触りを感じかけた。

彼の声に耳を傾けていると、別の寮生が寮の掲示板に彼の主張を、いくつかのポイントに分けて整理していった。「ここに私たちの主張を整理して、あとでまとめて大学側に送りましょう」、掲示板に論点を整理しながらも一人の寮生はそう言った。「そうすれば、きっと大学側も何か対策を打ちますよ」。

話し合いのあと、人のいなくなつたロビーで、空のペットボトルと紙コップを片付けながらあたりを見回した。

そこには私に不安を語った寮生の痕跡はなかった。あとにはホワイトボードと、いくつかの論点が残った。

この経験を通じて、私は話し合うことが含むいくつかの側面に心惹かれるようになった。何に心惹かれるようになったのか、また惹かれた理由は、語りのなかにきつとあらわれているはずだ。

また、ここで私が語ったことのなかには、話し合うことをめぐるいくつかの問いが含まれているだろう。その問いを経験から引き出し、抽象化し、疑問文の形に直し、整列させることもできるし、それらに暫定的な答えを与えることもできるかもしれない。問いの形で提示しておけば、誰かが答えを与えにやってくるかもしれない。しかし、私は自分の声を消すつもりはない。声を声に、経験を経験に対置させ、そこに浮かび上がってくる何かを、語り出した誰かとともに感じとってみたいのだ。私はこの文章を書きながら、誰かが語りだす声に、まだ形をもたない残響のようなその声に耳をすましている。

あかさか しんたろう

大阪大学人間科学研究科博士前期課程。